語林類葉

ふへほ　十五

ホ 2
502
15

東京大學圖書

語林類葉巻之十五

清水濱臣輯

ふの部

一言

ふ丈

太平記五 大塔宮熊野落 ゑゝしハ丈山伏めてり間○今昔廿五

糸衣櫃ハ本丈荷テ出来タリ

本丈

門 和2 號 502 巻 15

某ふ

拾遺愚草上四十六 うらふ○万代雑一 好忠 萱生野に

萱生野 カヤフ 山城

ミノフ
サゝフ
ヤケフ
苔生
凢生
園生
アサ生 麻カ浅カ
杉生

○後拾遺雑四 うかりけるこのふち浦 ○万代雑三 頼氏

さこふ○曽丹集 二月 終 やけふ○夫木二春草 光俊 や

りふ○夫木三早蕨 為家 うやふ

六帖 うかりし

わたせんみやけふの多稲を適きつゝんかれしうちにかゝえん抛この

○夫木九凢 長方 園の凢生の

あし湯の 思生の 揚穂 いてされは 行をとゆるとこそ とくの世そて

夕されは 浦風吹て うつれく 湯の入江の 秋のあさふり

あしへおく 湯との辺の ふきさそ 山の杉生の 雪にえつるし

○夫木篠 安嘉門院四条 サゝフ○

某ふ

為忠後百

北にのけ井みよりまて 花かるゝ なきは このうすへりり

同 為重

うれしも花のあふの き湯ふて 風にちりくる 雪の花か

○

二言

某ぶき

後拾秋下 橘俊綱朝臣

うふくも わきあふきの 男か宿は ふりあまさへ かゝせさりけり

林葉四

あらたさそ 野辺の かり旅はさしつたに 見えぬくその 雪ゆ上ふき、

夫木七 顕昭

たえつゝ うの花ふきゝの かり庵や をとさへもさえぬ 雪のしかふ

アシブキ
雪ノ上ブキ
杉ブキ
雲の八重ーー
卯の花ーー

イナフキ
えなふ

○万代冬 師俊 杉ふき 待ゝの ○夫木八 貝親 家

の八重ふき ○同 同同院按政 家の八重ふき

夫木十二 西住法師

いなふきの山田は露に龍和して夕つゆは了の夢のときく

○後拾 恋二 和泉式部 あしの宿ふき ○藻花 和泉 敵

い一条の清きしきの屋ながしとつらせ多ひて家ふき

○撰集抄七

ふぢ 竹器

拾玉二 早蕨

さわらびのをりにし時は忘川の糸をふきてにかゝるみちの夕暮

同四廿九異本

春の日に家をたらみて忘川は流れて下ん内恋れける

ふき 多

万八

いめなるこみの宿のあてしなの花ふき多えり家はときてちんける人の為

同十七

あきの田の穂むきみとなり家せ者ゝ布佐多乎里家流乎美奈敝之

○小馬命婦集 池つにたる忘川るとち川もちふきにる

○字都保 祭使 人長忘つり左に多えり為れとも多ては

つらかまし多んともふき折り ○和名大角豆注 離々読布佐奈

流見 ○うつ保 卯初秋上 古 わきつ白浪 ○同 蔵開 又君に忘るふ

文選

さしなの川

大和物語 をふきのうはまといふ所は

ろいつとく人やみなもあふをみなかをふきに流きつめつれは

在次君

ふさ　総

宇都保 吹上中 あさきそへつきものしりかへ　きてのふさよく
ゆひつけてあり○東鑑四十八 十五 先陣随兵十二騎
懸総鞦○

ぶち　鞭

字鏡
○拾遺衣　聖徳太子〻〻ぶちをあげて〻〻　○神代紀

｜｜ノハエ
｜｜ノアト
｜｜ノスサヒ
｜｜ノオロシ
｜｜ノオキテ
｜｜ノシタ
｜｜ノサキラ
｜｜ノナカシ
｜｜カロク
｜｜ツキ
｜｜エ
｜｜ノアヤマリ
ツカミシカキフテ

ふて　筆

高野日記 ふてのあとえ成あり コレハ繪ニ作ヘリ
みゆきの御袖をしもかきのこしき、ふてのあとの本
○拾遺愚草上 卅九 筆のすさひ○同上 五十八 ○狭衣
二上 筆のおろしも多まきらんと中々へ○筆のかきて 源氏
梅枝 ○同 同 筆のしりとりて見ひめくらしまとさはく○浅
松中納言物語一 そのつかり筆のさすかしいとかしきて
○同四 さくつき筆のかうまし○今昔廿八廿七 午ノ書
様微妙クハ无ケレモ筆軽クテ同代午ノ程ニ

○同 同卅六 鳴呼繪ハ筆ツキハ日ニ書ケレ氏○
同卅大ナル筆柄ニ入レテ共ヨリ出サセタル
也○水鏡 文武条 なとひらき給ほにあひなふとしいそこう
まめあやゆりちいれうん○源氏 ふとつし ふところに懐しけ
なまつつみしらき年

ふし 拠ニ不図(フト)とあるいて
竹取 さきとちゝ見て ふところにきりえらいまいうましおしく
ほゆうん○大和物語 女ふところひける○源氏 初子 あれ
なかしと ふところえて○

栞 十二
ふて
宛(アテ)文 東鑑八 ○宛文 盛衰記四十一 ○張文 東鑑九 五十三 ○渡
文ノ渡文由 九大 今昔十六 卅七条 御前ニテメ事ノ由ヲ申テ
慥ニ己レ渡ス由ノ渡文ヲ○同 同 渡由ノ文ヲ
書テ○盛衰記十洲金千両冨士ノ綿千両ノ送
文ナリ彼送文ヲ後サマニ投捨テ○同 廿七 和
君ハ軍ノアレカシ氏文読ミシト思ケルカ 系図カキ
也○怠状 九 今昔廿五○同廿八ミ 此五人ハ兼テ
院ヨリ廻シ文ヲ以テ可参キ由被催タリケレ

宛(アテ)文 張文 渡文 送文 氏文 怠状 廻文 立文 箱文 下文 怠文 寄文 添文 裏文 申文

ハ○同一同十此唐櫃只今祇園ニ持参テ誦経ニ
シテ来レト云テ立文ヲ持セテ○同六同廿除目
ノ所ニ陣ノ定メニ陣ノ御座ニ被召テ清忠所
棟並テ箱文ヲ給ハル間○同七同廿此日代守ノ
前ニ居テ文書共多ク取散シテ亦下文共ヲ書
セ共レニ印指スル程ニ○同六同卅息文立文○
同卅一廿四祇園ノ神人等氏人等ノ延暦寺ニ寄
スル寄文ヲ書儲テ共レニ判ヲ加ヘヨト押責
ケレハ○同廿六十八底ニ立文アリ披テ見レ
ハ糸悪キ午ヲ以テ假名ニ此ク書タリ○和泉

式部集 内侍ありしわりてつきの年七月に御のうす文に
名のかゝきしをとを○浮 宿木 もいのうえへハりきのわきく
てふゝめて○同 浮舟 みとりのうち中わりつゝみふゝみち
わわきやうわりた 中略 今てふゝとりえて ハ浮舟ヨ ツ、シ文
リ中君ヘタテ文ハ右○花つゝ文ハゑきねわりての
近ヨリ大伸ヘナリ
やしめてつゝじて○同 同 その女ともちのあつうにつきかへし女
らんうちとはふゝをく○○同 同 白き色紙にをとをふ
うく○後撰春下 除与に閨月あるといつつき絶しの頃
此中文女

三言

ふうじ 封

北山抄 封字のかはりに近代ハ忽引墨ヲ

林葉五 待返事恋 とくとみのなひてもさいそれをこにそしゆひせんそへましとそえん

夫木文 前段部分雅有 かきひいえて久しはよ浦まつうきみなかふるめのうえかき

○今昔廿七 十二 緋ノ組ヲ以テ上ヲ強ク封結ニシテ 餌袋ヲ ナリ ○

ふくろ

新猿楽記 似夏牛ノ閫(フクリ) ○愚管抄六 元久元年七月

十八日に修禅寺にて又頼家入道をさし刺殺ーてけりとみにえとりつめざりければ頸に緒をつけふぐりをとりなどして殺してけりとこそきこえし○

菓ふくろ

ありふくろともいふなるぬきゝふくろかいえしうかきれすこせん

○堤中納言 うるさきなちなるうけ袋に入て○源 若菜

さんかしのさかれ玉のさそくしたるやうてそれらみやと

ていまなるをきのかうえいなるをとりきなるふくろにつゝみて○盛衰記十九 懐ヨリ文袋ヲ取出シ中ナル

ウケー
ハリー
スリー
文ー
布ー
屏風のー

院宣ヲ進ル○今昔廿五十一十日許ノ食許ニ干
飯ヲ袋ニ入テ布袋ニ裹テ腰ニ結付テ○澀東屋
扇風のふところにいまもあるなる所にかせうけ○枕冊
子廿八 きえけれるをみれば小舎人わらはのなきつ
みふところにさしぬきしつること○

ふき絹

山家集下七十一

○愚管抄七 ときもを又わしふき絹にそめんの詮なり
あつそさんと思ふには○

ふし木

伏木○節木

万代雑一　よみ人しらず
ふして駒はゐるや見えとへ川野原のうき草かくれ行

続詞花戯咲　仁和寺家
あさ絹かへ入るまして出かたく玉枝をれてうきの出かへ行んに

夫木廿一　権大納言実家
夕暮くもあまく浪かゝる谷河にうきの枕みえてくたり

続詞冬　仁和寺宮
谷川のうきに絹かうちなしいつらの床やさむけうらし

万代冬同

為忠後百首　為業
春くれば山のおとしも絹きてさうてちるのうつ木花さく

頼政集
谷川のうつ木か枝にせかれたるみな川をそれはそみちくたり

雲葉集　藤原教嗣
そ海山に有てるふし木のいまをつたにれとむし人のちきみれける

○

ふし見

字鏡連字部　低視　和見逆見也大加　比目又不志目　○瀝　若紫

なきぬれたまひしさまうたにおほえつてふし見にねきて

ふりふしたまひに○同夏ふし見せさせ之え○枕衣一

上卌九○平家物語二廿八ウ　○続世継ちとせ

いつもかくてふりふし見にねりまへりけるほどに○盛

衰記六十○同同十五○今昔廿五十三元端ノ世ト

云シカハ臥目ニ成テ和ラ立シカ○同同卅五○

瀝　ねのちかのしきを海かしけりのあふさきてふし

見にねりて○同浮舟　わすれもしい夜りまさんふし見之

散木経信くつりてみはりぬるきまてふるりとて

岸のうへをさらぬれいあらきねし我のふし見にねまぬるい

○

諷誦（フジユ）

拾遺哀傷　詞書

ふせご　伏籠○ふせごの少将　物語名

拾遺貞外

うち返しふせごのうちみ蝉声に声のさころやは川かをふらん

○

ふるは　二間

讃岐日記　ふるはのる聲のみ波のみ立て　○同　ふる間

みそあらんと修まらん（御衆の大般若之）○同御形のつとて

にふるはのそなちておんなしく律して誦させたひて○（佛間）

ノヤウニ キコユ

ふてる

大和物語　しも多あり川にた多きりぬきくぞ渇らて○（ステ）

ツナ○今ツカヘ人ノ主ノ意ニマカセス不奉

リ○公スルキフテルトイフモ同語カ

○ホカスト云モ捨ルニテ同語カホ

カスハホヽカス保叙ニ出タリ

ふなき　舟子

宇都保　中　吹上　舟子うんとり多くて○

ふのり　不能

栄花　花山　八　東三条の大将也ふのりをそこしらひてかく

る人いたにそていたやけのさえたに大事いてきたんを

はん○

ふくさ　文筥

濱松中納言　ぢんのふくさのなまめかしきかほるを

ふうりう　風流

鎌倉右大臣集　的のまふらしに大井川をつくりて松た
着のかへるかたを○夫木六○続世継二　ところの　みのり　百体の
みあかし一夜にほとはしるふうりうかほしみし
まりて　○同四　宇治川尾　こはいろにふうりうはくし
て女房の車ふりにつくりてみちのあはひいりして○同十

花鳥の　うちきて　うつりかはりの風流めくしはきの○袖中
抄十七　をくらの山　風流にをくらの山の月をおもふらんならぬ
こゝろのうつつりかなるを　源蓮律師
思ひ出るもはつかしき風流にをくらの山の月みおもはせん
○師光集　ならふさのお時祭の使にあかうりけふりいはし
の風流をしと使しらん又何日のあるなる又の大納言のもとに
に遣はすべし使出
ならふうき花の花にてみたしし風の物もならし
○万代秋　一条家のらんさの時けふき使ふる風流の扇
に恒徳に　○弁内侍日記上　清水にかへるきなる風流

に九十之もとゐふうりうきらを　下畧

ふうりう

東鑑九文治五年正月十九日若君御方結構風
流模大臣饗儀藤判官知通為有職営此事○同
同嘉禎四年八月十九日今日御昊条也将軍家
於今出河御見物間渡物風流結構異例云々○
同八同十嘉禎四年閏二月三日御儲被尽美御贈
物風流棚各錺金銀置和漢書○同四十九正元十一年三月
廿七日賜風流積帖絹紺絹等於女房之中○同同同年

四月三日御息所御方進風流造蓬菓○同五十二文
永三年三月卅日僧正被献風流一脚○同三十五
仁治四年正月五日云々御儲太結構御引出物
及風流云々○尺素往来麾下部皆當色摩鉾持
以金銀風流付于衣裳云々○今昔廿八五此ノ
為盛ノ朝臣ハ極ク細工ノ風流アル物ノ物云
ヒニテ人咲ハスル馴者ナル翁ニテ有ケレハ
○同同五卅風流賊ヲ尽シテ金銀ヲ以テ荘レリ
○

ふりて　振千

万七　みなとのあしのうらはをたれかたをりしわかせこか振(フル)
千見(テヲミント)とわれそたをりし〇略解云振(ソテ)袖(フル)千(テヲ)見(ミント)ノ脱字
カ〇六帖にふり袖をみんと

ふり袖　古　根

後撰恋五
笛竹のもとのふり袖はかはるともおのかよゝにはならすもあらなん　よみ人しらす

〇拾遺賀　うちむれしはる人のまさしくおとせぬ待まて
まかしちとせをふれとよみ人しらす

君まちていかさぬんことえぬ竹のふり袖のおひかける袖て

ふいご

四言

催馬楽　真金吹　梁塵愚按林はふいごの袖は鉄也ふいは鞴
治のふいごにあてゝふき袖をふきとほく

ふるえて

万二　人九　長哥　角勤経　云々　ふかみるの深日千罷

鷹〇古今　長哥　ふるきをつみのわかきをふるえてそひてし〇

ふきほす　吹干
万代冬　雅経
白妙のさゝらも吹ほせあらしのやまてゝらす天のかく山
○

ふくあみ
源　蓮生　うゝや紙陸奥紙ねとのふくあみに○枕冊子
十四
［］あつ文の端あまりあまりもいときよけに持
ねしてふくあえて○同　廿［］えんのきぬしふくあみ
ふまくん○栄花　見えてぬ夢　廿二　いとおかりりふくあみてそこ
○埃
嚢抄

ふきたし
栄花　花山　廿五　おとくきぬし　ふきたぬきはあし○源　夕霧　ふき
たしうりぬ

ふしうち
栄花　浦々の別　あや唐うらすらうおほきくまし　いふしう
ちあて心をくさせあふ○

ふしそく

新古恋三　前参議家通

つらしとは思ふものからふしゝはのしはしもこりぬ心なりけり

夫木廿二　為家

思ひつゝかまとの山のさゝふのふし柴しき多かりあきよかりけり

散木　述懐百首

ふし柴のこるはかりのかわきのことかたえにねをさきそへ

夫木廿九同

続詞花恋下

ふし多り

万代夏　仲実

散木夏

なきぬはしけきをおもへてなき　菖蒲や伏田のをゝへふなたちにけり

ふせくみ　伏組

栄花　をかの花　たゝのいとしてふせくみし〇

ふるし

新六　うもれ木　光俊

明ぬるかもみの山路をゆけはふるしとききそいはあかれし

〇枕冊子十七　扇ハふるしとまつなれて〇今昔廿四十義紹カ良キフタト當ニケリ〇墨管抄四かの懐かしき皿をふるしとおほしなりけりもと〇

ふつゝか

万十八 かたおもひを馬に布都麻におほせもてこしへにやらは人かたはんかも

○源 若菜下 清らなりしなりもみしらぬよし

ふつゝかにゆゝしきけるてきゝ也 ○ツヨリタル心也 ホメタル方

○同 東屋 ふつゝかに書なしため 布尼ノ老筆 ○源 朝顔

ふつゝかにさちし○

ふなすゑる

和名 舟車類 説文云 艐 子紅反 俗云為流 舩著沙不行也

○古本催馬楽

○土佐日記

○鹿苑院殿厳島詣記 今川貞世 あふけゐ小屋みや

こうせなひゐるほとに老わうちきて舟おきぬとてあらま

しえ又めしてゐるる

○ うき舟しゐるおき川に落りたをいたけるやありぬ頭しほにふなのおくらん

ふわ〳〵 フワ〳〵カ假字未詳

東鑑四 廿三 顔ハフワ〳〵トシテ希有之仕官哉

○

ふら〳〵　今云フラ〳〵
今昔廿六 三 足ヲ離テ綱ノ上ニ踊ケレハフリ
〳〵ト落ル程ニ逢也ケリ○

ふるあは
雲井ぬくのり　たか山うけに年へたる古屋あり○

故郷（フルサト）
源 若菜 下　いとゝ山ふかう古さとにうちたえの
見えしうちにのきわたりし遠く　コレハ兵部卿ノ宮ノ御カタ
カタキノタヽフルサトナレト
北方ノオハサスナリテナ
レハフルサトトイヘリ

ふるほく
いさよひ日記　よもの方ぬふるほくもを○

ふくつけき　五言
枕草紙　ちゝうはゆるよさそうかにさえかうとはえして
ふくつけきは又おもてにかくあらくに○　細流　貪（ムサボル）也○

ふりうれ　今俗憚シテヒケラカスト云語原ハホコラカスナルベシ自慢也

保憲女集
ちくさらん草木にもふるしらをんなをうきやふけうつる

○続世継　ふしみの雪のあるうつりいふ体見ふりうれに

○同　同　りせるあはうにふけうきせらまりる
にさそ

ふしうへを　説云フシマロヒ　吟云子カヘリ也

後撰恋四
ほのうらしめるまにかうし吹つにふうへりきそるれまかし

保憲女集
うへきさえ山をふ峰つし草るけるとも人いかにしとや見ふ

○

ふしまろふ　臥所

全葉恋上　公実
君ひきやありしそのよれ夜半あらしふしまろびふりきそれ

○

簡衆（フダノシウ）

東鑑卅二廿二下　被レ加ニ前右大臣家普香院御ーー一

ふところ　懐午

濃初音
ふところにはしつとめる那きこえさこの

ふところあへず○

ふはさみ

大鏡二　此史ふはさみにはさみていれくふみ遣ひて

さるあやしにもて遣つるぞ○江次第廿五今案件見

参挿文夾覧上卿云々○記文ヲ竹ナトニハサミテタテヽツルナリ

○竹取一人の男ふはさみに文をはさみて○古本今

昔廿七卅一ふはさみに文をさして罔の上に捧て○今

昔廿五九忽ニ名符ヲ書テ文差(サミ)ニ差テ怠状ヲ

具メ○江次第石清水臨時祭抄随見参到来候

御前蔵人挿文刺奏覧畢返給○

ふみたがへ

栄花　暁待星　此家の御ふみたがへに○

ふりきりし　降遮(フリキリアヒ)相ナシ

二条太皇大后宮大弐集

ふりきりしあきらけの空晴るかりかゝれ出る月とさへみまし

○

ふりつみ

和名鞁皷○栄花 月宴 四十九 つゝみに殿上へふりつゝみて
して参りせられ○千物名ふりつゝみ○続詞 同
夫木十八 栄花 隆季卿
九重の雲井の上をかりやらふあのほとにともなふふりつゝみ 日久 社久
久安百首
○
ふりきうせ 古風○イニシヘフケトイフ意也
拾玉四五 古風をいふて清山にふりせ清し暮のうちのうちにしも
花鳥井集 懐旧 きけいあはれに思ふふりき風今更身やいにしへの松

ふるひこゑ
今昔十九 十一条 侍程ナク振ヒ音ヲ挙テ○
六言
ふだをけづる 簡ヲケヅルハ解官也
栄花 花山 卅五 あそんしもさふらふほとは簡をけつらせ給○
源 須テ ふだにけづられてつかさもとられて○
ふつほうそう 佛法僧鳥
性霊集補闕云後夜聞佛法僧鳥詩閑林獨坐草

堂暁三宝之声聞一鳥々々有声人有心声心雲

水倶了 云々○躬恒集 長歌アリ

赤染集二十六 佛法僧となくなるをきゝて

こゝろすみてなくなる声をきけはうき身をのこゑそたのもしき

拾玉一

後の世もなほたのもしきみのりをもゆめにきかせて

新六 ミゝ 光俊

○弁内侍日記 上略 ちるはゝみえぬ鳥のこゑのみそきかれし

おほきかけ

新千釈教 貞信公

こゝにかくみのりきく君か代はあはれこの宝わすれもしれ

○夫木集 佛法僧の題あり 歌四首 ○ クホノスサヽ ヒニ奉シ ○

ふきなかう

今昔廿七 廿六 牛ノ踏ハタカリテ不動テ立テリ

ケレハ○

ふんやらしそ

江次第五 釋奠 淫问籍 間明經 称文屋童 明法 称

学生 算 称算 乃生 ○ 拙 学生名文屋童也

七言

衾の宣旨

盛衰記卅爻ニ白川法橋幸明ト云僧アリ三塔
第一ノ悪者衾ノ宣旨ヲ蒙テ山門ニハ安堵シ
難クテ當山千僧供ノ料所愛智郡胡桃庄ニ忍
居タリケルカ○

ふねなかしたる

古今長哥 伊勢 おきつ浪あれのみまさる宮のうちハ年へて
すみしいせのあまも船なかしたる心ちして○待賢門
院堀川集 さ浪うへさせおくれ浪く日やりて浦ともに流り
てきすうたにおくれ年へせぬることを思ひて 哥 浦々に
さし出てもいかにかへて哀みて

和泉式部集 なにしやさしい船流したるあまのかんあるさめ海にくるまよし流し
ちとせに馬のりにける人あるいに
古本敦忠集 わかれぬ人をわすれなくて年へぬ舟流しかりあまのかたちて
いせの海に船を流して志はしくはあまと思ひてかねへきか
斎宮女御集 浦遠く舟流したる海士なれは己の袖のうらのしほなれ

○

ふなかさきこその

栄花 円宴 廿一 みえもきらきらもふりうきことのにおわし

きこえさせたまふ フリステカタキノ意ナリ ○源 蓬生

○同朝顔

八言

ふるきあはれまさ

源 玉かつら むつましきふるきのあはれはなれ○

への部

一言

へ 放屁

今物語 おもなしおほきなるへをおとして出家にけり

○同 たちのしるしなりけりとおもひて○

スカス

へ 為忠後百 為業

ちる花やいそのへちかき山伏の苔のむしろにうちしきぬらし

ヘチ

ヘタ

二言

へは　かはべはなと俗語にいへり○押付ル意也

万七 姪押(ヲヒナヘシ)とよめるは押をへしとよめる也○枕冊子
十九段 さいそのかみへまゐしてまへしのあかりにみんをよみつけたる○

へた

落書露顕序　うけたる所ありとてへてとやかへつき○
袖中二　二 よろき男をんへるあといふ也○古今顕注ニを
うみへたに　へたとはいふ　ほとりあきさしてまへにかせてよろ

きみをも随ひといへる○

へど（アナヘト）

和名歟吐○竹取あるへとをつきてのたまふ○

へや

宇都保 祭使　くさひらのほかなるをあつめたるは雪をつくへてへやにつくるなとて年うさかりぬ○へや　誤字を可考

へを

六帖 大しか

へをつけて山に入りあしたかの いとなき みくさ そへ ころか せそて

○

三言

べしけ

長明無名上 頼政家後恵撰事 うわ家の 祝とかしも

ぢ所てんとへしけにら絶るとふそ ここえ多き ○ べし 別 気 所

よくしうの家をとりてんをうちて別様にならるとふ 京 所ん

又按 可気 あて たしけとよる所へし ○ 又按 たしげ 所る 京に

てもべしげの 御この 狩谷 棭斎し 可の

詠もしべしの御 所んとしくま ○

へをく 未考

六条大弐集

御葉そ なるのそりやふるつゆにふられて花の 前くふられも

○ 鷹ノヘオニツケ ○

鈴ヲ 作フカ

へ達きし

和名抄 鷹犬具 鞲 唐韻云 ー 音搆 漢語抄 云 阿麻岐 大 射 収

へ [illegible]

繳具也

四言

べいたん 餅餤

和名抄

んとふゆのをふる川のへてつゝきたり○

○枕冊子 たなはた祭 へいる

へしくち

盛衰記十共キモ不知花ヤカニ装束シタル者

カモト、リハナチテサハカリノ御前ヘ献（ヘシクチ）口

ニ気色メ出タリケル了○同三廿八始ヨリヘシ

（クチ）口メエモ咲ハズ○同六ヘシ口メ去ハコリト

テ○

へにさら 頬粉皿

隆信集物名 へにさら

名もしにあふいらをしきいりふさくにさらあもぬすふ承たろらい

○

へちまそ

濆朝瓶 むつかしもあまく へちま おくさられい○ 年月 十往

テ心ミラヒノ○

セサル了世

へんつき 幕績

枕冊子 四十三段 さしつとゝてへんをとそつく○ 草花 月宴

ヘラヌクナ
ヘラヌ體

おもしろくうゐせへんをつくせいしれなりをせさ歩て

○

五言

へぬさは

盛衰記五祐蔓ハ廿七ヘラズ○同六入道ハヘ

ラヌ體ニテ○同同楯ヘラヌ體ニテ○同卅七

ヘラヌ體ニモテナシ○著聞図画物の中にもか

くれてハわるく へもおりにいまり思しハヘリクタ ラスナリ○

七言

可の字をよふ

四季談 四月 内のあれにつきれの帰りしてとりして宣

命を内侍のうたにつきて待思しハ主上帰もらとへさ

せたひて帰りつくる ありうせ気みあそして可の字を帰

りつくる見させ給へハ云云

ほの部

一言

ほ　秀

続世継　ひできの　ほにいでてこそいはねどこゝちせなふといき

あえさせ給て○

二言

ほし

和名文書具　○袂衣二上　ほし

くめのさらにおちちりぬい○紫日記　ふるきほんごとき

ホンゴ

さかし○霊異記下巻卅八本垢○大鏡一三条

ほしとおほして赤捨させ給て○

ほし　楫

万代哀三　源頼国朝臣

たなはたやほしくらしる河のあさ衣うちや濡しもやまぬ袖かな

新六くさき　信実

夫木廿九

星人のほしきるもののうらめきかさねての衣あれぬしらし

ほしだ　穂田　万○ーーー小川をさくの田之

万四

秋の田のほのかみかりそめいかなりあくまでもひとのことをかなさん

○

ほて　最手

北山抄裏書云予検旧記正暦四年七月廿二日

云々其後最手以下五人犢鼻褌列坐庭中○三

代実録

保憲女集

春の野の草ほてみて風にふきつらなるほてをまん(さ)ため(なき)かな

○守部保　印古　初秋 仲津白浪

ほと　女陰

守部保　中　終聞

いかなる人のほつきなる女まゐらせらんとて

ぼで

閑窗
康
玉門
くほ
くを
長谷
つゞ
さ(?)

えもりや又かさとのくほありてたちはのさくくらみさ

ろく尺 仁寿殿女御 チサシテ云 あゑみちなりぬすなちいさかく

ほとゝもにうゝきてうきまなかり

ほろ

母衣記可考○三代實録十七廿二下縫造調布保
侶衣千領以備不虞○

三言

ほうげ 火影

保憲女集
天の川ちかき陸にあまりほしはくも陸にうかふほうけかな

○

ほうろ

延喜式外居○江次第一外居一荷拱云長櫃車
也○実方集 連歌 うき 福海のほうろくりり○字彰保
吹上 上 もとんわほいなる なつにきゑなる ほうろさゝせて
上 わとのうく○

ほうきち

山家集上
わしの山ほきちつきひにかけ入てきえしたるハ一とりかも
同下
あやふさに人めそつねにかゝりける岩のかとふむほきのかけみち
壬二集田
くら山のほきのさほ田をうちかへしまくやたねのみしるらん
全冬　大中臣公長朝臣
後葉集
為忠百首
顕季集　埼本廿オ

ほくみ　穂組
万代秋下　知家
あしひきの山田のほくみおきあけてかりほの床にねられぬるかな

新六　信実
秋の田のかりほのほくみいつになりあまるほとてみきをひにけり
○

ほくみ
方丈記　落穂をひろひてほくみをつくる○

ほくら　神庫　紀
字鏡　○拾遺雑恋　いなりのほくらに
女のまへて　○　和名

ほた木
続世継　かゝみ松　ゆきふりぬる白川なきてかゝらんの
ほた木のうへあはれなり
ほつえ　穂末　○大かたは最枝（ホツエ）なるを穂末（ホスヱ）ともいへり
拾遺愚草上
難波かたとふりつむみなれあしのほつえおしなへ初雪ぞふる
○
ほくし　クヒカセ也
字鏡　○和名

古今
よのうき免見えぬ山路にいらんには思ふ人こそほたしなりけれ
拾遺雑恋　人まろ
みかりするこまのつまつく青つゝらきみこそわれはほたしなりけれ
○縻　玉かつら　くるちのほたしにそてひきとめてなん
○今俗諺ニ子ハ三界ノクヒカセトイヘル即同語也　○
ほつ
堀百首　俊頼
よかり舟ほつて志免なしらせ川せのやなき風にまかせる
夫木三同
為忠後百　於政
ちかはらなみちかたきこそ附るともなる舟のほ川やいなき
○

ほとき 缶

和名

ほときにいる十六の佛ほときへ○

○栄花 うへの みまつらせて

ほとけ ほとけの物

万四
いかにおもえんとされはほとけにもあひしもなほいへえさらん

○此方に下級を受けて侍ることと読詠之り 本居氏は保抒も
友は保都もみし 祝神代紀にこと之り

○宇都保 祭使 ほつまさへてらしていふしの佛をと

もえをつくしときいほとき 勝

盛衰記廿一 御門大納言成親公
心をつくしてしかのゆかしきことかいに欲りしまのほとけもやさん

続古釈教 家
うしとても思ひほとけは我の世をいとふは人のさめぬくらり

○

ほとろ

方丈記 よもぎのほとろほしきつかれてみをしきて夜の床

とぞ

ほむらみ 穂 並

新古秋上 前太政大臣
風渡る山田の庵をてらすはやほむらに心ある秋の月まし

○
ほうじ　法事
拾遺 哀 朱雀院の御四十九日の法事にて○涙 紅葉 桜
うみ渡る涙しもみちにけし○

ほむき
万二 秋田之穂（ホムケ 旧訓 ホムキ）向之よれるかたよりにきみによりなゝこちたかりとも
○万十七 秋田乃穂牟伎○

ほむら
拾遺哀 えしれし秋のちきりをあはれとてやまと桑のさかりききく 君
○

ほろし　未詳
拾玉四 我のうきかゝるほろしの紅をあさましうつしのえにしきさるや
○

ほうさく　四言　報強

愚管抄七 あさましく ほうさえみてあれつりあくるさ
そあるしほうし○ 報強トいツノ人ノ果報タリこシリ強剛ニミテ引動ミカタリ
悔慢ナリカタキヲイフ○

ぼけづき
演末二 ほけつきそて侍りて○同 同 ほけつきなふとけに侍りて○

ほしいゐ 干飯
箋苑 玉基 又干飯 侍といふものを然しいていけほり木

そしゐしものに多はふ

細高（ホツタカ） ノケタカリヤセタル也
今昔廿八 廿一 長ツシ細高ニテ極クアテヤカナル様ハシタレモ○

ほそつゝ 細包
江次第一 五位細包（ホリツミ）一連 抄云 細包謂綿也 延喜中宮式云 五位綿一連云々○

細長
源 宿木 四位六人ハをんなのさうそくにほそなかそへて
○花鳥引李部王記可考○江次第二十四 注 紅濃
打細長○源 玉かつら ほそなかにうちきのよろしきなし
わらはゝあをきほそなかに○同 梅枝 紅梅うき紋のかさねのほそ
なかそへたる女のさうそくかけゝる○今昔廿四 三 女
ノ装束ニ被副タリケル 紅ノ打タル細長ヲ○
増鏡 おりゐる雲 女のさうそくに細長そへてかつけゝる
ほそのを 細緒

宇都保 あて宮 春日詣の末に錯入 かくて大宮御ほそなかのを
きりたまふ○同 蔵開 こはまろ君の御ほそのをきり給
ひんとて○

ほそかは 細流 ぬのをりの数
枕冊子 三段 あそひにてあるかなそのかたをかし
ゆきつゝほそかはのみきはに見え○同 きらしくまへりある女
らしきほそかは○同 九ノ卅 うちにほそかはのふかに
書ちらして○源 野分 ほそかは絶くそのにうくしうけ
てゆきちるその人ともあり○東鑑四十九正元二年

三月廿七日被ㇾ下ニ細檀二合 各納帖絹二十匹 於刀自等一

○

ほとほと

枕草子 八十三 賢木 きんきことも聞きをほとほと笑ふここ

今いうて上衛ほとをあけく闇と云けんく

骨張

東鑑三十八寛元五年六月八日就中光村萬事

有骨張之気○

ほねなる 情ヲ強（コハリ）スル也

長明無名抄上人さそ ともんそのは思ふ所あり

て身をもちんとほねなるべきなり○東鑑卅四仁治二

年十一月廿九日之々朝村令雑色男乞此箭家

村不可出之由骨張

ほころふ

水鏡下 此ほとは道鏡もいまいほころうに参りつつ

うちつきまりしうえ○

ほうし

大和物語に ふつゝしあつし捨てみて同語の 可知 可考○

ほだて

今昔十六 廿条 賑戸ノ保々立ヲ捕ヘテ○

本妻（ホンサイ）

宇都保 春日詣 本妻としえらぶ人をもすてゝところし

迄て

ほろし

をるとか雄略紀 宇都保 くさきを おとろへを ほろしとおとして○

まゐつとにとてかきいひほろしとあるいはおつるときたえへ

○二条大蔵集 あかつきにきしのうちわきて こゝに

みちしみし あるまにさて

みつの野にとゞまりきしは ほろしとれらし家もきひし とゝみる

○

五言

法師ちり（ホウシ）

茶花 玉のうてな　の法師ちりの時うしにみしうりしに○

星月夜（ホシツキヨ）

今昔廿七（五）翁和ラ立返テ行クニ星月夜ニ見

遣ケレハ

堀百 常陸

我れひとりかまくら山を越行は星月夜こそうれしかりけれ

千載新勅 為尹

池の面にうかふ蛍の星月夜秋なき空にさえて

ほそをとこ

紀略寛弘二年五月九日丙辰紫野御霊会也東

西二京條坊十列細男也○宗佐八幡縁起繪巻

物○茶花 若枝 御霊会のほそをとこめてのかさしして

うほうつしあるきもちほそ

元貞集 ほそをとこ

ほとりそみ

らしとちゑみつきわまへらかれとほろかちゑみなかんにて
あせなかんもあつはいとほしかほえて　コレハタヽ　ハシツカタ
ノコニ
イヘリ○

ほろとうへ
新六　かさひやひ　光俊
ありをはなてほろ人をときかひをれはさきそは骨とかへてかはしぞ
○文集新楽府　隠山道　飛龍但印骨与皮○

ほろをとる
新六　ゑなり　光俊
山ふかくほろの〇にいるきはしかありをとりしほろをとるか

同
ありもとさせる事かきつかま笠ほろをとりてそ君につくし
○伊勢物語知顕抄　ありしちかしをつくしほろをとるかひもなく○

ほゝかぶり
盛衰記卅四我着タリケル薄墨染ノ衣ノ脛高ナルヲ脱テ打懸タリ三位是ヲ室ニ著テ頬冠（ホヽカブリ）シ給タリケレハ衣短ウメ腰マハリヲ過ス○
太平記廿三　十六　一度ニサツト馬ヨリオリホヽカブリハツシ笠ヌキカラヘ地ニツケテ畏

てりケル〇

ほろけて　ほろしきなて

濱 鈴虫　かえふのはうをあはせたる名香みちをかくし

ほろゝげてたきにほはしたる〇

六言

ほいの布

濱 花散里　うちほいの布〇

法親王（ホウシンワウ）

續世継　たかしの御子　仁和寺に覚行法親王ときこえ
ましし　白河の院のみこにおはしまし　中略　白河院内親
王といふなるもあまたおはしませしかとそれ
しかて法師の後親王ときこえおはしましゝかくて後お
つきゝ御くみも出家の後の親王ときこえさふらふなる

星ノ御門（ホシノミカド）　何帝ヲ申ニカ可考

盛衰記三　近ク吾朝ヲ尋レハ星御門ノ臣下ニ
日唯季通ハ三公ニ昇ラント山王ニ祈申シカ

八神ニ被罰亡ニキトイヘリ○

ほそきんだち

挾衣一下十九　ほそきんだちのうけめみて　わろせんなりい

○

ぼだいのたね

万代雑三　花のさかりに僧正遍昭のもとにまかりける

静観僧正

年をへていたづらなりしぞ花の山菩提のたねとなりぬるかな

○

ほとけのあに

新朗　陽成院御願文　言其尊儀則娑婆世界十善之王宝筭又釋迦如来一年之兄○文粹十四

永久四年百首　老人　仲実

よはひをぞひさしきみよにほとけのあにとこそなりけん

○大智度論六十九般若波羅密畢竟空是三世十方諸佛之母

千釈教　隆信朝臣

隆信集下釈教

くもりなきそらのみちしるべこゝろのほとけの母ときけ

○ほとけの名稱　伴権

万代釈
すなはちに佛はち名稱は なにとも なれく内にとこ見ける
同同　選子内親王

新勅釈　深観
菊水はて佛の名稱もをつまくしけるの聞えんことも名のもし
返し　明覚
なれもまれ佛の名稱を おきつるさの木聞しもあさし見へは
続後拾釈　選子内親王
かくなかりんみちに満せなる佛の名稱を ととめけれ

○

ほとけ食ふ

今昔廿八　三　擽栗ヲホトケ食フ次ニ○

ほとくしき　危殆ノ意也○迎(ホトリ)壅しくしきの物語みて神のきくゆて引つまりしおとくく○音便ニテホトニドト云

万七　みなきとるみをの祝かいふ杉にしなきてきりほとくしくにてそのまもぬ○土佐日記　ちみともしえてへそをきしにえそきてほとくしくうちえ見つへし○枕

冊子十　廿八　ほとくしえのかる満しく待つるを

拾遺恋四
あらきさかる人入山のをみちえのほとくしくも聞にけるかな

同雑恋　国茂
まつくるちゝのとよみのよるのおとほとくしかる聞えもみかん

六帖
ふしの山おりきちやうふをみえの ほとゝしゝもゆるしほ本

○

骨をかくる 茶毗ノ後骨ヲ拾ヒテ頸ニカクルヿヽ

菩提 ちくの あふつきみハ 数珠骨うけさせたまひて出る

へるとしせたまひて○

ほとゝきす

菩提 同宴 五十八 ほとゝきすをきゝ○守つ保 藤開 上中宮

思ひに ほとゝきす○同 同 一声ととまひ ほとゝき

ふ○盛衰記十二左モ右モ御計ニ随ヒ奉ヘシトテホクツ咲(ヱミ)テ出ラレヌ○

ほやのゆき、

袖中十九○ 穂屋トハ諏訪明神ノ御射山(ミサヤマ)祭ニ長官五官領家等ノ造ル假屋ナリドイヘリ今小縣郡ニ穂屋ノ地名アリ

ほうきう祝の井

六帖井 ほうしゆる ほうき祝のかみ鹿をあさて ひふんを 何にたとへむ

伊勢集 いつてかとえふんい ほうき祝の井 なりも 桜 ふさ 咲きける

散木恋下久恋
あさからぬ契りてかはせ ほりかねの井のつゝきみを
千載雑
むかしの堀かねの井もあるものを たえしく人のたえつきたり
山家上
汲てしる人もありなん おのつから ほりかねの井の底のこゝろを
夫木廿二 野　後九条内大臣
堀かぬる名をのみきく武蔵野も こはるまへの浪の下草
新六 山の井　信実
ほりかねにあさぬ山井のあさければ 我もさながらにあかせてぞくむ
○都土産 ほりかねの井さかうしたえめぐり ○
○後撰口伝 武蔵なるの ほりかねありふかりまし 女房
ありかねつゝとさそあなつゝもなれ なからへの 尼上 ○
七言

ほしをいたゞく
詞花　能宣
年ふれて星をいたゞく黒髪の人よりしもになりにけるかな
○拾遺愚草中 六オ ○
ほとけのつゞれ 草花名
経信卿母集 ほとけのつゞれといふ名を聞ていふ 百
和香あつめ人
花のさくの人をそはなもまつりつるされや 仏のつゞれなりけん
○邦俗ニ云 仏ノ座也 ○小野蘭山啓蒙小牘云 元宝草 ホトケノサホトケノツヽレ 本草従新云｜｜｜辛寒補陰治吐

血𧖧血生江浙田塍間一莖直上葉對節生如元
宝向上或三四層或五六層○

ほの字の君の字　堀川院ナ申ス

讃岐日記　ほのしをとしのきわとし生まるれめりと仰
らるヽは堀河院の御事とそく人えさせ給へるとこそ思ひも
らいくうて　鳥羽院ヲ幼の時のまく ○

十二言

法師の子ハ法師をうき

大和物語　法師の子ハ法師をうきとてわきもし　法師
にれしてりり○扶桑畧記遍昭の子の法師素姓由
姓二人雲林院に在しらしうえをり○

法師をれうきわきれし

茉花　わやく岩つほ　一千日の御とき見て　ほうしをれ
うき　御わき　れをい　みて　わくしまひ○